

「高度動物医療と終末期動物医療」～動物看護師の視点から～

Highly Advanced Medical Treatment and Terminal Care ～ From the Point of View of a Veterinary Nurse



ネオベッツ VRセンター 動物看護師長／一般社団法人日本動物看護職協会 副会長・富永 良子
Ryoko TOMINAGA, Head of Veterinary Nurses, Neovets Veterinary Referral Center /
Vice President, Japanese Veterinary Nursing Association

○富永良子 よろしくお願ひします。またネオベッツかと思われる方も多いと思いますが、現在、私はネオベッツVRセンターで働いておまして、もう1個、所属先を書いているんですが、動物看護師の職能団体がありまして、そちらのほうもかかわっております。ちょっと2つの名前を記載させていただいております。では、よろしくお願ひいたします。【スライド01】

まず、私の自己紹介からさせていただきます。【スライド02】

出身は山口県なんですけども、高校を卒業して大阪に出てきて、大阪ペイ動物看護専門学校に入りました。そこを卒業しまして、細井戸先生の病院なんですけども、大阪市内の鶴見緑地動物病院で働き始めまして、先ほどからお話がありましたように、病院の形態がどんどん変わっていきまして、私の経験としては、一般のかかりつけの一次診療、あとは夜間救急、二次診療、そういったいろんな勤務体系で今まで働くことができました。

一次診療では、大体五、六年ぐらい働いていたんですけども、ワクチンを打ちに来た子犬が動物病院を好きになるように子犬の教室を開いたり、あとは毎週点滴に通われる飼い主さんといろいろお話をしたりしながら、今もそうなんですけども、動物や飼い主さんにいろんなことを教えてもらいながらやってきた。現在、動物看護師としては15年目になります。

もう先ほどから何度も出ておりますので、私からはあんまり詳細の御説明は必要ないかと思いますが、現在のほうで働いております。主な診療科としては、脳神経外科、整形外科、軟部外科、腫瘍科、循環器科、眼科があります。1日の平均手術件数は、大体4件ほど。CTやMRI、こちらも麻酔は必ず必要になるんですけども、大体合わせて6件ほどになります。1日平均10件ほど、麻酔をかけて検査、手術、そういったのを受ける患者さんが来院をされています。【スライド03】

これも先ほど本田先生のほうからありましたが、VRの意味です。Veterinary Referral、獣医師とか照会という意味の病院の名前になります。現在、スタッフは獣医師が12名、動物看護師が20名、事務・受付スタッフが5名、このようなメンバーで日々診療に当たっております。【スライド04】

VRセンターは、かかりつけの動物病院から紹介をされた患者さんの診療に当たっております。そのため、皆さん、何かしらの身体的な問題を抱えていらっしゃいます。来院されるほとんどの患者さんが、麻酔をかけてのCTやMRIなどの検査を受け、手術が必要と判断されることも少なくはありません。中には、状態が悪過ぎて麻酔がかけられないほど死に直面している重症な患者さんもいます。最後のとりでとして、何とか命を助けてほしいという気持ちで来院される飼い主さんも、多くいらっしゃいます。【スライド05】

子犬のころから通いなれ、親しみのあるかかりつけの動物病院とは違い、大学病院のような初めて受診するVRセンターに来院される患者さん、飼い主さんは、多くの不安を持っておられることだと思います。大切な家族であるペットが病気を抱えていれば、なおさらその不安も強くなります。ですから、私はVRセンターを一次診療と同じぐらい、それ以上に温かい二次診療施設にしたいと思って、日々仕事をしています。

また、入院になれば、動物看護師が各患者さんに担当としてつき、看護を行っていきます。重症な患者さんが多いため、飼い主さんから離れて入院する中で、気づいたら亡くなっていたということ为了避免するために、VRセンターでは24時間の看護態勢体制をとっています。大切なペットが、病院で誰にも診みてもらえず、1人で亡くなったということは、飼い主さんとして最も悔いの残るペットの最期ではないかと思ひます。

ここからは、私がVRセンターでかわらせていただいた患者さんのお話をしたいと思います。【スライド06】

この子は女の子、2歳の猫ちゃんです。原因不明の脳炎で入院治療をしていた患者さんでした。神経症状により寝たきりで、意識レベルも低い状態でした。飼い主さんであるお母さんは、毎日面会に来られ、女の子をだっこして時間を過ごされました。面会時は担当の動物看護師が付き添い、女の子に行っている治療や看護の内容についてお伝えをし、また、家での女の子のことも伺いするなどコミュニケーションを図り、女の子の抱えた病気とともに闘う気持ちで寄り添いました。

日により、自分でうろうろと歩いたり、調子のよい

ときもありましたが、うちに来た時点でも、10日以上何も食べていない状態で、そのことだけでもとても心配な状態でした。口から摂取できない分、点滴で栄養を補給していましたが、さらに肝臓に負担をかけて機能不全に陥ってしまい、治療を継続することが悩まれる状態になりました。

獣医師からお母さんにPちゃんの状態を説明し、自宅に連れて帰るかの選択を家族でしてほしいと話がありました。その日の夜中に不整脈が見られ始め、すぐにお母さんに連絡し、お迎えに来てもらいました。そして、帰宅後1時間ほどで、Pちゃんは息を引き取りました。

数日後、お母さんが挨拶に来てくださり、Pちゃんの最期の様子を話してくださいました。お母さんに抱かれ、苦しむことなく、眠るように、ほほ笑んでいるような顔で息を引き取ったそうです。

ここからはお母さんの話なのですが、何度ももうだめだと思い、治療を断念しようか悩んだけれど、あの時点で連れて帰っていたら、絶対に自分を責めて後悔をしていた。最終的に、先生がもう無理だと言うところまで精いっぱいやってあげられたことに満足、感謝していると。みんなが決して諦めない、治してあげるんだという気持ちで治療に当たってくれていたのがすごく伝わった。悲しくないと言えそうにはなるが、Pちゃんは寿命を全うしたと思えると、笑顔で話をされました。

助けてあげられなかったことは、スタッフ一同、本当に残念で悲しいことなんですけども、Pちゃんが自宅で安らかに最期を迎えられたこと、お母さんが納得してPちゃんの死を受け入れられたことは、心からよかったと思います。自宅に連れて帰る見きわめをどこでするかは非常に難しいところではありますが、Pちゃんの場合は、それが適切に行えて、よかったのではないかと思います。

済みません、ちょっと緊張して震えるので、靴を脱がさせていただきます。



次の患者さんは、Pちゃんです。顔にできた腫瘍なんですけど、扁平上皮がんで手術、放射線治療を受け、通院の治療を受けられていた患者さんです。【スライド07】

痛みがあるときは食欲が落ちて、大好きな散歩も行きがらなくなるため、鎮痛剤をおうちで投与してもら

い、点滴などに通ってもらっていました。頭にもがんが浸潤してからは、けいれん発作が起きるようになり、座坐薬を入れてもらっていました。

私は、通院になってから担当させていただいたのですが、途中、安楽死を悩まれたときに、私に相談してくださいました。そのときは、食事もとれていて、くるくる回ったり、ぼうっとしていたりということは見られましたが、Pちゃん自身の苦痛はそこまで強くはなかったため、まだ早いと思うとお伝えをしました。それに、お父さんは安楽死に反対しているということでしたので、家族間で反対をしている人がいるのはよくないとお話をしました。

それから少しして、Pちゃんは自宅で最期を迎えました。後でお手紙をいただき、最期はお母さんの胸の中で眠るように息を引き取ったこと、安楽死を考えたが、結果、後悔することなく最期を迎えられたというお母さんのお気持ちを知ることができて、心からよかったと思いました。

患者さんが亡くなるのは私たちにとっても大きなショックで、精神的に落ち込んでしまうこともあります。でも、飼い主さんからこのようなことを聞けたり、自分たちが、患者さん、飼い主さんにとって何か役に立てられたなと感じたとき、ありがとうと言ってもらえたとき、本当に救われる気持ちです。

あと私は、できることなら、やはり最期は自宅で迎えてほしいなと思っています。でも、以前、ゴールデン・レトリバーの患者さんだったんですけども、飼い主さんの事情と希望から、病院で最期を迎える子がありました。初めは、何で自宅でみとって看取ってあげないんだろうかと、かわいそうというふうに理解できない気持ちがあったんですけども、病院で息を引き取った後に、飼い主さんが「偉かったね」と涙を流しながら全身のブラッシングをされている姿を見たときに、飼い主さんの思いが伝わってきて、こういう最期の迎え方もあるんだと知りました。【スライド08】

このような経験から、動物たちの終末期を、これはちょっと終末期とは違うのかもかもしれませんが、いろいろ考える中で思うことは、最期はペット自身が決めているということです。もちろん、全てがそうではないかもしれませんが、その環境は飼い主さんが決めることにはなるんですけども、飼い主さんの到着を待って息を引き取る患者さんをたくさん見ていると、人間側のいろいろな心情も酌み汲み取って、動物は一瞬一瞬を精いっぱい生きて、その結果、最期をどのように迎えるか決めているように思えてなりません。

もう1人、かかわ関わらせていただいた患者さんのお話をしたいと思います。きょう今日、この後お話を少しさせていただくんですけども、私が入院看護の重要性、やりがいを含めて一番すごく感じた患者さんのお話です。

3年前に担当した患者さんなんですけども、日本猫

のニちゃんです。ニちゃんは、沈鬱、くるくる回る、あとは瞳孔が左右非対称であるとか、そういったことを主訴にかかりつけの動物病院から紹介され、来院されました。MRI検査の結果、脳ヘルニアを併発した脳腫瘍と診断をされました。脳がヘルニアを起こして、脳幹部という、生きていく上で非常に重要な器官が圧迫されており、いつ呼吸がとまってもおかしくないくらい状態が悪かったです。【スライド 09】

手術の予定日の朝、状態が急変し、呼吸がとまりました。この写真でもあるんですけども、すぐに気管チューブを気管の中に入れて、そこから人工呼吸で維持をすることになりました。その日の午後、脳腫瘍の摘出手術を行い、術後には若干の自分での呼吸は見られましたが、十分ではないという判断がされ、麻酔をかけて人工呼吸管理を続けることになりました。【スライド 10】

術後2日間、何度か気管チューブを抜くことを試みましたが、数時間後には呼吸困難に陥るため、この時点での人工呼吸からの離脱は困難と判断されました。

術後3日目に再度、獣医師から飼い主様に現状の説明、そして安楽死も含めた今後の治療内容の相談をしたときに、飼い主さんが、知人で2カ月間の植物状態から回復した人がいる、決して諦めたくない、治療の継続を強く望まれました。正直、そのときは、どこまでいけるんだろうかという不安もありましたが、みんなでベストを尽くせば、この子は助けられるかもしれないという強い気持ちもありました。

結果として、ニちゃんは、手術から6日目にやっと気管チューブを抜くことができました。その間は、獣医師、動物看護師が連携をとり、24時間徹底した管理、看護を目標に、ニちゃんに向かい合いました。

獣医師からは、脳圧が上がったり、意識レベルの低下を防ぐための指示として、呼吸中の二酸化炭素濃度を低目で維持すること、また、体温を通常よりも低目で維持するなどの指示が出され、まずはそれらを確実に遂行することが大切でした。

ニちゃんが回復に向かうためには、24時間体制での徹底した看護が必要不可欠であり、少しの変化も早目に気づけるように、状態を把握するため、15分から30分ごとに、心拍数や血圧などを記録、経時的な身体チェックと観察、そこから適切な看護を行う。ずっと人工呼吸器につながれて、体の機能が低下しやすいことをも考えられましたので、それを補うためのケアとして、口の中の唾液などを除去してきれいに保つこと、また、目が乾かないように目薬を入れたり、全身を拭いたり。

飼い主様とのかかわりとしては、毎日の面会時、または電話で状態を適切にお伝えすること。そして、ニちゃんを助けるために、希望を持ち続け、一緒に闘う仲間としての気持ちで、少しの変化に対する喜びなどを共有するように努めました。

最も大変だったのは、何人ものスタッフが入れかわりかわるため、常に新しい情報と管理方法、看護内容、

そういったことを周知することが一番大変でした。いつ誰がかかわっても状況がわかるように、できるだけ見やすく、わかりやすくするように努めました。また、担当の獣医師や動物看護師と密にコミュニケーションをとりながら、状態、情報を共有することにも努めました。このときは、一瞬でも気を抜いたらニちゃんを助けることができないような気がして、必死で看護に当たったのを覚えています。

このようなことを行った結果、術後6日目で、人工呼吸器から離脱することができました。

ニちゃんは、トータル2週間の入院治療後に、目立った後遺症もなく退院することができました。脳ヘルニアにより呼吸不全に陥り、一時は安楽死の検討もされた状態からの回復は、御家族の喜びとともに、私たちスタッフにとっても、大きな喜びと今後の大きな励みになりました。

初めにもお伝えしたんですが、私は、看護の重要性をここまで感じたのは、正直初めてでした。今まで、獣医師が精いっぱいの治療を行って、助からないものは仕方がないという考えがあったように思いますが、ニちゃんと、このヤリさんとおっしゃるんですが、飼い主さん御家族とのかかわりを通して、チーム動物医療としての動物看護師としての役割、また、獣医師と力を合わせることがどういうことなのか考えるよい機会となりました。

この後に、同じ状態の患者さんとかかわる機会があったんですけども、獣医師から、「富永、また頑張ろうか」と声をかけてもらえたときは、動物看護師として貢献できたことを認めてもらえたようで、とてもうれしかったのを覚えています。ニちゃんの経験で自信を持てたことでもあり、その患者さんもみんなで諦めずにケアをすることができて、良好な結果を得ることができました。

ニちゃんは、現在11歳になっていますが、元気に過ごしてくれています。動物看護師が入院看護を担う重要性や専門性を強く感じる経験でした。今回、このシンポジウムのお話があったときに、細井戸先生から、どなたか飼い主さんで出てくれる方がいないかというお話がありまして、どうしてもニちゃんのことをお話したかったので、ちょっときょう今日は御無理を言って来ていただいた次第です。また後で、そのときの思いをお話しいただきたいと思います。【スライド 11】

飼い主さんは、皆さん、大切な家族であるペットが健康で長生きしてくれ、ずっと一緒にいたいと願いますが、一生の中で病気になることもあり、大病になったら麻酔の検査、手術や入院が必要だと獣医師から宣告された際、治療の選択を迫られます。検査を受けて、原因を追求したり、手術を受けたり入院をさせて、元気にさせてあげたい。でも、麻酔をかけて検査中に急変することはないか、手術中や家族と離れた入院中に亡くなってしまうことはないか、そういった大きな悩みにつながっていることだと思います。

また、これは最も難しいことだと思いますが、回復

が思わしくなく、いつ亡くなってしまいかわからない状態の場合、自宅でみとる看取るのか、病院に任せるのか、また、状態によっては、安楽死が選択肢として挙げられることもあります。最期をどのように迎えさせるか、難しい選択が迫られます。【スライド 12】

小さなお子さんは別として、人であれば相談はできますし、患者さん自身の意向を聞き、決断することが可能ですが、ペットにおいては自分で決めることができないため、飼い主さんが決断をしなければなりません。選択した結果が先にわかればもちろんいいですが、そうではない中でペットの一生を左右することを選択するというに、皆さん悩まれます。

いつも思うんですが、これには決して正解はなく、御家族皆さんで十分に話し合い、決めることが大切だと思います。亡くなってしまった後のわだかまりにもなることもあるため、家族の中で1人でもそれに対して反対している人がいる場合は、さらに十分な話し合いをお勧めしています。

また、ペットの平穏な死を考えるにおいて、飼い主さんの気持ちはとても重要です。亡くなった後も、一緒に過ごした時間がいい思い出として思い出されるかどうか、そういったことを考えながら日々仕事に当たっています。

ペットの満足は、直接尋ねることができないため、飼い主さんが満足する一生をペットが送れたかどうか、そういったことになるのかもしれないですけども、飼い主さんとしてできることはやってあげたと感じられるのは、満足の1つなのではないかと思います。

そのために動物病院がやるべきことは、獣医師は誠意を持って十分に説明をし、きちんと選択肢を提示して選択してもらい、その中で最良の動物医療を提供する。また、チーム動物医療の一員として、動物看護師は最良の看護を提供すること、そして一番大切なのは、患者さん、飼い主さんとともに闘う気持ち、寄り添う気持ちを持って看護に当たることだと思っています。このことが、飼い主さんの満足、納得につながることで、ペットが亡くなってしまった後、少しでもペットロスの軽減につながれば、一緒に過ごした時間がいい思い出になるのではないかと信じています。【スライド 13】

ペットが平穏な死を迎えるに当たり、私の考える飼い主さんの役割とは、まず第一に、信頼できる動物病院を持つことだと思います。かかりつけの動物病院に満足していない飼い主さんは、意外に多いように感じます。信頼して診てもらえる獣医師、親身になって自宅でのケアなどを相談できる動物看護師の存在は、ペットが幸せな一生を送るために必要不可欠だと思います。これは、飼い主さんの責任でもある大切なことだと思います。【スライド 14】

さっきもお話をしたように、飼い主さんはいろいろな選択を迫られるときがあります。そのときに、ペットがどうしたいかは言葉として聞くことはできませんが、

飼い主さんなら、ペットが何を望んでいるのか、何となくでもわかることがあるんじゃないかと思います。もちろん、最終的には飼い主さん、家族がしっかり話し合い、決断しなければならぬことですが、ペットの一生を左右する可能性もある、最も大きな責任だと思います。

ペットのことが原因で家族関係が崩れることは、ペットが一番望まないことだと思います。そして、信頼できる動物病院でちゃんと健康管理を行い、高齢になり、最期が近づいてきたときは、思い残すことがないように、したいこと、やってあげたいことを、できる範囲ですることが大事なのではないかと思います。

ペットが平穏な死を迎えるに当たり、この3つが、私が思う飼い主さんの役割です。

VRセンターで働いていて、正直、結果として、手術をしなければよかったのに、もっと早く何とかしていたらと思うことはあります。高度動物医療って何なんだろう、本当に必要なんだろうかと思った時期もありました。今までの患者さん、飼い主さんとかかわわりを振り返り、思うこととは、結果として命はなくなってしまいうけれど、少しでもその時間を延ばしてあげること、お互いに幸せな時間を一緒に過ごすことができるのではないかと思います。ペットの死を受け入れるための覚悟をする時間を持つことができる、それが高度医療の1つのあり方ではないかと思います。【スライド 15】

何においても、飼い主さんの後悔はあると思います。ペットロスは少なからずあると思います。でも、ペットに対しては、苦痛を取り除き、元気にしてあげること、できることをやってあげられたと、飼い主さんの悔いができるだけ少ないように、そのための治療の選択肢が高度医療なんだと思います。

私は、そこで働く動物看護師として、飼い主さんと患者さんの抱える病気と一緒に闘っていく気持ちで、二次診療なんで、かかわる期間は短いんですけども、少しでも信頼してもらえて、つらいときにつらいと口に出してもらえる、そんな関係づくりを心がけて看護に当たっています。

最後になりますが、私の考える平穏死とは、やはりペットが苦痛なく安らかに最期を迎えることだと思います。私たちは、家族と一緒にいるときに、眠るように息を引き取ってほしいと願いますが、仕事が休めなかったり、望みどおりにはいかないこともあります。でも、先ほどもお話ししたように、ペットが自分自身で決めた最期は、受け入れてあげることが大切なのではないかと感じます。【スライド 16】

もう一つは、飼い主さん側のことですが、ペットが平穏な死を迎えられるように、一緒に過ごしたことを、存在をいい思い出にしてあげることが大事だと思います。病気になったときは、動物病院が、飼い主さんが望む動物医療を提供し、その部分での満足や納得を得ることはペットロスの軽減にもつながることで、一緒に過ごした時間をいい思い出に変えてあげることができるんじゃない

いかと思います。そこは、動物病院のスタッフとして、その一人として、最大限努力しなければならない役割だと思っています。

済みません、拙い発表でしたが、私の思いは以上になります。【スライド 17】

じゃあ、ヤスリさんに、そのときの思いなどを少しお話しいただきたいと思います。



○ヤスリ…… こんにちは。今、紹介にあずかりました、私、ヤスリです。

今から3年前のことですが、2011年の年初めです。当時は、我が家は妻と娘と息子、それから猫、犬、4人と2頭の家族でした。本日、その中の、家族のうちの1人じゃない、1頭の猫です。2002年6月生まれの雄の猫、ニキのことについてです。

話の中身は、今の富永さんの話ともちょっとダブリますが、まず病気の経過といたしまして、ちょうど猫の面倒を一番見ている娘から、当初、ニキがくるくる回って、何か様子がおかしいと。何だろう、遊んでるのかなというのが、まず一番最初、病気に気づいた始まりでした。

それからあと、2月の中旬ごろから、急に元気がなくなって、布団の中でぐったりと長時間寝ている状態が多くなりまして、近所にありますペットクリニックですけども、そこへ行ったんですけども、もう四、五日の入退院を何回も繰り返す状態になったんですけど、やっぱり何が悪いのか、原因がよくわからない状態が続きました。

そのときに、そのペットクリニックの先生から、高度動物医療センターでMRIの検査を受けてみてはどうですかと勧められまして、その結果、3月末にMRIの検査を受けました。検査の結果、大きな腫瘍が脳の中にできていると、脳腫瘍であると。ほんで、そのために、中の脳が脳幹のほうに押し出されてる脳幹ヘルニアであるということで、手術がどうしても必要やということがわかりました。

その後、5日後ですけども、4月5日に5時間にわたる手術を受けまして、4月21日、無事退院という格好になりました。

このニキの手術ですけども、大きな心配というか山と、特に大きな心配なことが3回ありました。

第1回目が、MRI検査の結果ということで知らさ

れたときです。右側の脳に大きな腫瘍ができていると、それに伴って、脳が脳幹へ押し出されていると。また、体力も非常に弱っているの、難しい手術になると。また、もし手術がうまくいっても後遺症が残るかもしれない、再発も考えられるということも、いろいろと話を聞きました。

いろいろ家族とも話したんですけど、とにかく家族全員がニキのことが大好きであり、ニキもそれをよく知っていて、もう顔を見たら体をすり寄せてきて、皆にうまく甘える猫でしたので、とにかくニキのためにできるだけ可能なものは何でもしてやりたいという気がありましたので、とにかく手術を受けられるようにしてもらおうと。たとえ後遺症が残っても、何とか家族で面倒を見ることも考えたらいいんじゃないか、絶対諦めてはいけないということで、先生にお願いして、手術してもらいました。

次に、第2回目の心配事というか山ですけども、いろいろな準備もあって、手術の2日前に高度動物医療センターに入院をしました。午後から手術するという手術日の当日ですが、午前中にニキの呼吸が停止したと。今は麻酔をかけて人工呼吸をしているという連絡がありました。ちょっと呼吸が停止したんで、もうこれは手術ができないのではないかと心配したんですけども、話を聞くと、午後からは予定どおり手術をしますということで、一安心すると同時に、とにかくニキには頑張ってもらいたいという思いでいっぱいでした。当日は、夕方の7時ごろに長い手術がやっと終わりました。腫瘍は全部摘出されましたが、まだまだ予断を許さない状態ですよということで話を聞きました。

次に、3回目の心配事、これは人工呼吸器を外すときにありました。手術前に呼吸が停止していたことがあり、人工呼吸器を外すときも、うまく自分で呼吸してくれるかどうかちょっと問題であるということがありました。手術した翌日ですけども、1回外しました。また、それから2日後、3日後にも外しました。ともに5時間ぐら自分で呼吸はしたんですけども、5時間ぐら経過したところで呼吸がとまってしまったというか、呼吸停止となり、人工呼吸に切りかえたことがありましたので、もう無理かなという気持ちもちょっとはありましたけども、とにかく起きてほしいということで、もうちょっと延ばしてほしいということで、そのまま延ばして、人工呼吸を続けてもらいました。

それで、手術後の5日目に人工呼吸器を外したところ、やっと自分で呼吸ができるようになり、それが5時間、10時間とずっと続きまして、そのままうまく呼吸ができるようになりました。もうこれで、何回もだめかもしれないという思いがありましたが、そのたびにとにかく頑張っていて、何とか治してあげたいという気持ちがありました。

それで、あと手術した後に、「これが脳の中に入った腫瘍です」ということで、ちょっと瓶に詰めたものを見せてもらったんですけども、直径は1センチ以上あ

る大きな腫瘍で、これが脳の中に入ってたんだという形です。頭そのものが物すごく小さいのに、よくあの小さなところに腫瘍が入ってたなという驚きと、もう一つは、その腫瘍を取り出したために、それこそ頭の中の3分の1以上が空っぽになったのではないかと。よく回復するもんだなということで、やっぱり小動物に対してかなり先端医療技術が進んでるのかなということで、1つは驚きを覚えました。

退院後、ニキは、私の自宅には、ニキのトイレが下の1階に置いてありますので、ニキのトイレのある1階で昼も夜も、一応家族の誰かが付き添って養生するという格好で、半年間、1階で、猫と一緒に誰かが付き添いました。半年後に、2階へ上がる階段があるんですけども、それを上りおろできるようになってきたので、もう大丈夫だなということで、一緒に寝るのをやめたんですけども、それからは自由に階段を上りおろして、少しずつもとの生活に戻ってきました。

あと、今現在は、特に後遺症も何もなく、以前よりもさらに甘え猫というか、すり寄り猫になってきて、今も元気に走り回っております。

あと、最後になりましたけども、ニキの治療をしていただきました、そのペットクリニック住吉大社南、自宅の近くなんですけども、そこの藤井先生とか、ネオベッツVRセンターで執刀してくださった王寺先生、看護師長の富永さんとか、そのほかいろいろニキの面倒を見てくださった方々に厚くお礼申し上げたいと思います。どうもありがとうございました。

高度動物医療と終末期動物医療 ～動物看護師の視点から～

富永良子(認定動物看護師)
ネオベッツVRセンター
一般社団法人 日本動物看護職協会

【スライド 01】

自己紹介

- 動物看護師 15年目
- いろいろな形態の動物病院で勤務
 - 一次診療を担う動物病院
 - 夜間救急動物病院



【スライド 02】

ネオベッツVRセンター

の紹介

- 2005年10月 大阪市東成区に開院
- 動物医療全体の向上を目的
- かかりつけの動物病院より紹介（二次診療）
- 脳神経外科、整形外科、軟部外科、腫瘍科、循環器科、眼科
- 手術：1日平均4件
- CT・MRI：1日平均6件



【スライド 03】

ネオベッツVRセンター

の紹介

- 「Veterinary Referral
(ベテリナリー リファラル)」の

略

→ 「獣医・紹介」という意味

- スタッフ
 - 獣医師：12名
 - 動物看護師：20名
 - 受付、事務：5名



【スライド 04】

動物看護師としての思い

- 飼い主さんの思い 「最後の砦」
- 多くの不安
- 温かい二次診療施設
- 24時間看護体制



【スライド 05】

患者さんとの関わり

- 優ちゃん (猫・2歳)
原因不明の脳炎による神経症状
入院治療継続の決断
自宅での最期
お母さんの満足・納得
 - やることは全部やってあげられた
 - 寿命を全うできた「死を受け入れる覚悟」



【スライド 06】

患者さんとの関わり

- パピーちゃん（ダックスフンド・10歳）

扁平上皮癌

手術、放射線治療、通院

安楽死を悩まれる

自宅での最期

お母さんから感謝のお手紙

後悔なく最期を迎えられた



【スライド 07】

最期の迎え方

- 自宅での最期
- 動物病院で迎える最期

- 「最期」は動物自身が決めている



【スライド 08】

患者さんとの関わり

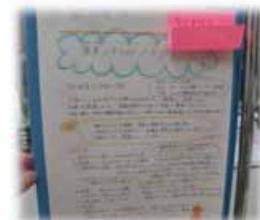
- ニキちゃん
日本猫、8歳10ヵ月齢、去勢オス、脳腫瘍
家族（5.60歳代のご夫婦、20歳代の息子
さん）
- 脳ヘルニアの併発により人工呼吸での管理
- 獣医師から安楽死の提示
「絶対に諦めたくない！」
- 6日間後の回復



【スライド 09】

患者さんとの関わり

- 獣医師からの指示
脳圧亢進予防
（CO2濃度の設定、体温設定など）
輸液、投薬 など
- 24時間体制での徹底看護
経時的な身体チェックと観察→適切な看護
身体ケア
患者家族との関わり など



【スライド 10】

患者さんとの関わり

- 2週間の入院治療後に退院
- 看護の重要さ
- チーム動物医療の大切さ
獣医師、飼主さんとの連携
- 入院看護における専門性



【スライド 11】

家族の決断

- 動物は自分で選択できない
治療選択—検査、手術、入院
最期の迎え方—自宅、病院



【スライド 12】

動物病院の役割

- 獣医師
 - 十分な説明
 - 選択肢の提示
 - 最良の動物医療を提供する
 - 動物看護師
 - 最良の看護を提供する
 - 共に闘う、寄り添う
- ➡ ペットロスの軽減に繋がる

【スライド13】

飼い主さんの役割

- 信頼できる動物病院をもつ
- 選択、決断する
- 最期は思い残すことがないようにする



【スライド14】

高度動物医療の在り方

- 死を受け入れる（覚悟する）ための時間
- 治療の選択肢のひとつ
- 信頼関係の構築
- 思いを吐き出せる関係



【スライド 15】

平穏な死とは

- 苦痛なく安らかであること
- 飼い主さんとしての責任
- 動物病院としての責任



【スライド 16】

ご清聴ありがとうございました



【スライド 17】